

紙版 **ハコブネ×ブックス** vol.30

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。



世界とキレル

作者 佐藤まどか
出版社 あすなろ書房
発行 2020年9月
ISBN 978-4751529492

review



進学したエリート中学で成績が上からず自信を失い、友だちのいない淋しい学校生活を送っていた舞。それでも舞はSNSでクレーム・シヤンティイと名乗り、明るく素直な、おしゃれでかわいい理想の自分を演じることで千人以上のフォロワーを獲得して心の支えを得ます。ところが、夏休みに参加したサマースクールで、舞はスマホを取り上げられてネットにつながれなくなり、アイデンティティクライシスに陥った舞は暴走し、脱走を試みますが、失敗。それでも一緒にキャンペーンに参加する子どもたちとの関係が次第に彼女を変えていきます。SNSやリアリティショーなど虚実の狭間にあるものを採りあげ、リアルを再発見させる物語です。全世界に繋がりがあがりながら、見えていないものがあることに気づいた舞は、自分の世界を大きく広げていきます。



境い目なしの世界

作者 角野栄子
出版社 理論社
発行 2019年9月
ISBN 978-4652203385

review



女子からは嫌われているけれど、可愛くて男子に人気があり、いつも誰かと付き合っていると噂される同じ中学校のミリ。そんな彼女と学校外で偶然に出会い、趣味が合うことに意気投合したヤエ。ところがミリは、学校での付き合い方を知らないから、連絡はラインでしようというのです。こうしてリアルではしゃべらないミリとのネットでの交流が始まります。ヤエは、ミリの親しい男子のコウともラインで繋がりたいと頼み、三人で親しくネット上で会話を交わすようになり。しかし、次第にミリとコウは学校にこなくなくなり、ラインからも遠ざかっていきます。ヤエは町で見かけたコウの後ろを追い、彼が入り込んだ商業施設でコウやミリが、どこか別の世界へ入り込んでいくことを知ります。サイバースペースに迷いこむモダンホラーは、リアルとファンタジーに境い目がないことを暗示するのです。

特集
オンライン子どもたち



チェリーシュリンプ (ファン・ヨンミ) 金の星社 2020年

友だちグループのネットのトークルームで仲間外れにされないように、いつも気を使っている中学二年生の女子、キム・ダヒョン。誰にも打ち明けられない思いを非公開のブログに書き綴る彼女が、ついに公開に踏み切る時がきます。世界と繋がるオンライン子どもたちの物語はこちらから。

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.30

2022年9月1日発行 ● 発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト「ハコブネ×ブックス」(非営利)を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。



Twitter 連携しています。

@tomostretch

特集

オンラインの子どもたち

現代の子ども時代を描く上で、インターネットを介したオンラインでの交友関係は不可欠な要素であり、児童文学もここに触れることを避けて通れません。この四半世紀、児童文学作品は子どもたちのネット事情の変遷を描いてきました。メールから匿名掲示板、ブログからSNSへとツールは変化し、いつでも誰とでもつながれる利便性が高まる一方で、常時接続の拘束性やネット上でも続く同調圧力は教室同様の閉塞感をもたらしています。それでも進化するネットコミュニケーションは、子どもたちの新しい自我の形をここに芽生えさせています。近年の児童文学は、ネットの虚実を二元論で捉えず、子どもたちの意識を深化し、匿名や虚構の世界に潜む自分のアイデンティティにも迫らせるようになりました。オンラインの子どもたちの深層を描く秀逸な児童文学作品から、ネット社会の位相を感じとってください。

#マイネーム



作者 黒川裕子
出版社 さ・え・ら書房
発行 2021年9月
ISBN 978-4378015583

review



両親の離婚で名字が変わった中学一年生の戸松明音(みおん)。自分の名前に違和感があるのに、学校では名字に「さん」を付けてお互いを呼び合う「SUNさん運動」というルールが敷かれ、明音は穏やかでははいられません。同じ地元の中学生が集まるSNSの「自分の名前がきらいなやつ集まれ」という公開トークルームでは、大人が勝手なルールを作ることに批判が集まります。明音をはじめ、これに賛同した子どもたちは、ネット上でのハンドルネームを名札に書いて学校で名乗り、このムーブメントはやがて学校を二分する騒動となります。ハンドルネームは正体隠すものではなく、アイデンティティを表明するもの。それを学校で掲げるとはリアルでも本当の自分でいたいという意志の表明です。名前を通じて中学生たちが考えを深め、成長していく物語です。

嘘吹きネットワーク



作者 久米絵美里
出版社 PHP 研究所
発行 2020年12月
ISBN 978-4569789644

review



六年一組の学級委員長、小野寺理子は、SNSでデマ情報がまき散らされていることを憂い、発信源を探し、嘘の画像や動画の作成をしている八吹錯という少年をつきとめます。嘘を広げることで子どもも真実を見極められるようになると主張する錯に反感を抱きながらも、嘘を見抜けるという錯の特技を利用して、理子はクラスのトラブルを解決しようとしてみましたが、つまらない真実は誰からも支持を得られないことを思い知ります。真偽をこえて何が正解なのかを考えさせるこの物語は、小学生二人の問答により現代のメディアリテラシーを考察します。ネットへの警戒感をおおるだけの安易なリテラシー教育に反駁し、嘘に騙されないことよりも、嘘に宿っている大切な愛を見つけ出すこと。ネット虚実を見極め、自らのスタンスをどう決めるかを問う革新的な作品です。